

キエフで「オレンジ革命」に出くわしました

今中 哲二

ウクライナ大統領選挙の第一回投票は昨年十月三十一日に二四人が立候補して行われた。野党候補の元首相ユーシエンコが得票率三九・九%で一位となったが、得票率五〇%に達せず、クチマ大統領が後継に指名し、プーチン・ロシア大統領からも積極的な後押しを受けて二位となった現首相ヤヌコービッチ（得票率三九・三%）との間で十一月二十一日に決選投票が行われることになった。

西部のリボフ州では八七・四%がユーシエンコ支持、一方東部のドネツク州では八六・七%がヤヌコービッチ支持という第一回投票結果が示しているように、両者の地盤は東西でまっぴたつに分かれている。ちなみにキエフでは、六二%対一五%でユーシエンコ支持が

圧倒的である。第一回投票で六%の得票があつた社会党のモローズがユーシエンコ支持を表明するなど、決選投票の下馬評ではユーシエンコ有利かと思われた。

決選投票が行われた二十一日の出口調査は、ユーシエンコの優勢を伝えていた。しかし、翌二十二日午前、開票率九九%の段階で中央選管は、ヤヌコービッチ四九・四%、ユーシエンコ四六・七%と、ヤヌコービッチの勝利を決定づける発表を行った。キエフの独立広場に前夜から集まって開票作業を見守っていたユーシエンコ派の集会は、ただちに選挙違反に抗議する集会となり、一カ月あまりに及ぶ「オレンジ革命」のはじまりとなった。

チェルノブイリ原発事故に関する新たな共同研究の

立ち上げということで、私が関西空港を出発したのは十一月二十三日で、ウィーンに一泊して二十四日にキエフに入った。ヤヌコービッチの勝利となつては、それまでの情報(私の知り合いはみなユーシェンコ支持)から判断し、キエフの事態は予断を許さないものになるだろうと考えながらの出立であつた。ベラルーシのミンスクに二十九日に移るまでの見聞を「旅行メモ」から抜粋して報告しておく。

十一月二十四日(水)

ウィーン発のエアバスA三二〇はほぼ六割の乗客。

二年ぶりのキエフの上空は曇り模様で、着陸態勢に入り地上がかすかに見え始めたら、エンジンを吹かして再上昇してしまつた。機長から、視界が悪いので上空で待機するとのアナウンス。三〇分あまり旋回し、そのうち燃料がなくなるだろうに、などと思つていたらなんとか着陸した。空港は一面の銀世界だつた。

オレグとバロージャの迎え。この二人との付き合いはほぼちぼち十年だろうか。気心が知れた仲で「やあまた来ました」といったところ。オレグの車で定宿ブラチスラバホテルへ向かう。一週間前はまだ秋だつた

が、数日前から雪が降り始めたとかで道路脇も真っ白。「独立広場の集会はどうか」と聞くと、「二〇万人が集まっている」と言われてぶつたまげる。マスコミはほとんど政府系で、テレビは一局だけが反政府系の報道をしているとか。午後四時頃にホテルへチェックイン。朝食付きで一泊六二ドルという勘定だつた。

オレグはいったん家に戻り、バロージャと雑談。バロージャはもともとキエフ核研究所の物理屋さんのだが、紆余曲折の末、現在はEUや国連関係の環境問題エージェントなどをやって食いつないでいる。現在取り込み中の仕事はないようだ。オレグが五時半に戻つてきて四方山話に参加。独立広場の集会はきわめて平和的で、集まっているほとんどは普通のキエフ市民であり、見物に行つても危険性はないとのこと。

共同研究の内容と私の滞在日程について簡単なミーティング。共同研究は「チェルノブイリ原発事故の実相解明への多角的アプローチ：二〇年を機会とする事故被害のまとめ」というタイトルで、トヨタ財団から七〇〇万円(二年間)の研究助成を受けることになつたもの。プロジェクトの経緯、目的を簡単に説明。キエフ滞在中に、「経済損失」「第二石棺計画」「汚染地域

復興計画」などについてレポート作成を依頼する相手との面会のアレنجジなどを要請した。

ミーティングを終え、軽く食事でも、ということになり、オレグの車で彼が住んでいる団地内のカフェへ。変哲もない団地のカフェだが、若い衆で結構にぎわっていた。バロージャに言わせれば、キエフの「イザカヤ」だそうだ。そんなに腹は減っていないので、私は魚サラダにペレメニ（ロシア餃子）にウオツカ。マイダン（独立広場）に集まっている大部分の人は、夜は引き上げるそうだ。学生や地方からのグループがテナントに泊まり込んでいるとか。軍隊は、内政には干渉しないということで中立を宣言し、キエフ市長はユーシエンコ支持とのこと。

選挙運動中にユーシエンコが毒を盛られたという話は確からしい。一時は重病だったが、現在の彼の体調は外見よりはいいとのことである。ラジオから、中央選管がヤヌコービッチ勝利の最終結果を発表したというニュースが流れ、オレグとバロージャは舌をならした。彼らによると、ヤヌコービッチはマフィアの親玉で、彼を支持しているのは、金で踊らされている輩だそうである。手続き的にこれからどういうことになる

のかと聞くと、選挙違反に関する最高裁判断が山場になるだろうとのことだった。三人で飲んで食って七〇フリブナ（約一四〇〇円）。

十一月二十五日（木）

朝食はホテルのレストランでバイキング。こちらに来ると、ときどき昼食にありつけないことがあるので、普段より多めに腹に入れる。午前中は、シチエルバクとの面会の予定だったが、バロージャからつかまらないうとの連絡。シチエルバクは、日本でも翻訳されている「チエルノブイリの証言」の著者で、医師、作家、元ソ連最高会議議員、元ウクライナ環境大臣、元駐米大使という肩書きの人物。現在は年金生活者だが、最高会議議長リトビンの顧問をしているそうだ。ペレストロイカ時代に、ウクライナの「緑の世界」を結成したが、実は、バロージャはその事務局長を務めた。バロージャの提案で共同研究メンバーに入ってもらったが、この騒動ではなかなか捕まらないだろうと思う。

バロージャと地下鉄（五〇カペイカー〇円）のプラットホームで待ち合わせて、フレシチャトク駅で地上へ出た。キエフの目抜き通りであるフレシチャトク大通りへ続く道は、ユーシエンコ派のシンボルカラー、



写真1 ユーシェンコ派が占拠したフレシチャトク通り

オレンジで飾った人々であふれていた。
マイダン（独立広場）でバロージャと集会見物。集会に二〇万人集まっていると聞かされ、そんなことが物理的に可能だろうか、といぶかっていたのだが現場を見て納得。独立広場前のフレシチャトク大通り全体

を群衆とテント村が占拠していた（写真1）。大阪駅前に一〇万人集まったと聞かされたら、「そんなことは物理的に不可能だ」と答えたくなるが、御堂筋を丸ごと占拠してしまえば可能だろう。大通りに面してステージが設定され、その両脇には大型スクリーンが置かれていて、かなり遠くからでも眺めることが出来る。次から次に演者が交替してなにやら演説している。合間々に「ユーシェンコ！ユーシェンコ！」といったコールが入るが、ウクライナ語の演説はほとんど分かんなかった。ポーランドのオツチャンが現われて連帯の挨拶をしていた（夜にホテルでテレビを見ていたら、元大統領のワレサさんだった）。

キエフ中の老若男女が集まってきたかのようで、集会のムードはフェスティバル状態。だが、酔っぱらいはひとりも見かけなかったし、お巡りさんもひとりもいなかった。大通りには数百張りのテント村が出来ていたが、テント村の回りにはロープを張って勝手に出入り出来ないようにし、入り口では身分証明書をチェックしていた。

十一月二十六日（金）

一〇時前にホテルを出発。バロージャと途中の地下

鉄プラットホームで合流し、地下鉄の終点まで行って、科学技術センター「シエルター」へ。ここでの面会相手は所長のクリュチニコフさん。事故を起こしたチェルノブイリ四号炉の残骸をコンクリートで囲んだのが「石棺」であるが、石棺の健全性が心もとないということで現在、「第二石棺」建設計画が国際協力が進められている。その計画の概要についてのレポート作成を依頼するのが訪問の目的。クリュチニコフは、その昔バロージャが核研究所にいたころのテニス仲間だったとか。この研究所は最近改組され、石棺問題だけでなく、ウクライナの原発の安全評価もやっているようだ。バロージャにも就職の誘いがあったが断ったとのことだった。第二石棺計画は概念設計が完了し、それを基に国際入札が行われているところだそうだ。クリュチニコフさんに、石棺の現状とたまっている放射能量、現在行われている安定化工事、第二石棺「アルカ（アーチ）」の概要についてのレポート作成を依頼した。

バロージャとカフェに入り、昼食にボルシチとビール。カフェのテレビはマイダンからの中継を流している。バロージャによると、第五チャンネル以外の放送局がマイダンの集会について報道をはじめたそうだ



写真2 独立広場の反政府抗議集会と筆者

（これまでは全く無視だったので画期的なことだそう
だ）。教育大臣が各大学に対し、マイダン集会に参加した学生を処分してはならない、授業をするかどうかは大学の判断に任せる、と通達したそうだ。西部の都市では治安警察がユーシェンコ支持を表明したそうで、

全体の流れはユーシェンコ側に向いているようだ。

バロージャとマイダンへ出て一時間ほど集会见物（写真2）。昨日と違うのは曇りでちょっぴり寒そうだったこと。「ユーシェンコ」「コール以外のスローガンで良く聞いたのは、「スバボードウ・ネ・スピニーチ（Свободу не спинити）」（自由を止めるな）」と「ナス・バガータ・ナス・ネ・パダラーテイ（Нас борато — нас не подолати）」（我々が多い、我々を屈服させられない）。学生さんは隊列を組んでスローガンを叫びながら集会の回りを練り歩いている。地下鉄マイダン駅は人混みで危険なので別の駅を使うよう集会事務局からアナウンス。バロージャとひと駅分歩いてから、地下鉄を乗り継ぎ四時過ぎにホテルに戻った。

部屋でひと眠りしてからテレビをつけると、五チャンネルはやはりマイダンからの生中継（写真3）。番組のタイトルは「選挙二〇〇四」なので、先週日曜の選挙終了からぶっ通しで生中継をしているのだろう。相変わらずマイダンは盛り上がっていて、警察学校アカデミー学生、女性歌手、国防軍合唱隊などが次々に登場して演説や歌。国防軍合唱隊の歌はなかなかのものだった。



写真3 第5チャンネルのテレビ中継

夜一〇時頃、オレグから電話。彼は今日、日帰りでチェルノブイリゾーンに出かけて会議に参加するはずだったが、キエフ情勢のため会議が中止になったとのこと。オレグはこれからマイダンに行くそつだ。「泊まりに行くのか」と聞いたたら、「寝袋の差し入れ要請があ

だったので、これから持つて行く」とのことだった。テレビにはユーシエンコが登場していた。クチマ大統領、ヤヌコービッチ、ポーランド大統領、リトアニア大統領、OSCE（欧州安全協力機構）代表、EU代表、ロシア議会議長との円卓会議を終えての登場。円卓会議では、暴力的解決をしないこと、最高裁判断をまつことなどで合意したらしい。

十一月二十八日（日）

バロージャから、ようやくシチエルバクと連絡がとれて、一時間に会うことになったとのことで、地下鉄トルストイ広場駅で待ち合わせ。バロージャは長男のアントンと現われた。アントンは、昨日はマイダンに居たが今日はキエフの囲碁クラブに行くついでだそうだ。この父子は囲碁ヨーロッパ大会にも出場する強者である。街角でシチエルバクと落ち合い、カフェに入つてコーヒー。シチエルバクは予想通り気さくな人物で、現在のウクライナの状況はポリティカルなチエルノブイリだ」と表現。チエルノブイリ共同研究について手短かに説明。共同研究レポートとして「チエルノブイリの回想」を書いてくれと依頼。また、再来年の春にチエルノブイリ二〇周年のシンポジウムを東京で

やることになれば、日本に来て欲しいので頭のスミに入れておいて欲しい、と依頼しておいた。三〇分あまりだったが、なかなかいい会談だった。

バロージャと一緒にまたフレシチャトク通りへ。天気は悪いがこの日は日曜でもあり、フレシチャトク通



写真4 独立広場前の大群衆

りは一段とフェスティバル状態（写真4）。通りの両脇には地方から集会に出てきたバスが延々と並んでいる。一台四〇人として一〇〇〇台来ていれば四万人という勘定である。ユーシエンコのオレンジの旗に、青と黄色のウクライナ国旗、ときおり白赤白のベラルーシの前の国旗や赤白のポーランド国旗が見える。その中になんと日の丸まであった。何ものならんと思つて、旗の主のところまで行くと日本からの留学生二人であつた。「えらい目立ちますな」と日本語で話しかけると「目立ちに来たんです」との答え。半分あつけにとられるが、出歯亀はこちらも似たようなものかと思ひ「お互い気をつけましょう」と言つて別れた。これだけ集会が続くと都市機能が麻痺しても不思議はないのだが、暴力沙汰はまったくなく、大通りが通行止めになつて歩行者天国が毎日続いているといつた光景である（写真5）。ビル電光掲示板の温度計はプラス一度だった。

集会を抜けて、地下鉄ポルタバ広場駅からバロージヤのフラットがあるミンスカ駅へ。今回のウクライナの混乱に対する第一の責任者がクチマ大統領であることは間違いないが、バロージヤによると、大統領に権力が集中しすぎているのが問題とのこと。現行憲法で

は、大統領は、首相を指名し閣僚を任命。また、検事総長、各州知事と各地区長官も大統領の任命。つまり、大統領は、行政と司法・警察権力を一手に握っている。大統領選挙前に、大統領権限を削る憲法改定の動きが議会であつたが、ユーシエンコ派、ヤヌコービッチ派



写真5 フレシチャトク通りテント村の炊き出し風景

ともに自分たちが勝つと思っていたので改定案に賛成しなかったとか（憲法改定には議会三分の二以上、つまり三〇〇を越える賛成が必要）。バロージャは、選挙前から大統領権限削減を唱えていた社会党のモローズを持ち上げていた。

バロージャ家に着くと、ヒバチ・パーティーをすと言ってバロージャが張り切りはじめた。こちらとしては、ベランダに火鉢でも出してシャシリク（串焼き）でもするのだろう、と思っていいたら、折りたたみコンロと炭を下げて、歩いて一〇分ほどのドニエプル河畔まで行くんだそうだ。「これは尋常なパーティーか？」と奥さんのレーナさんに聞くと、「ニエツト!」との答えだった。といって客の立場で文句は言えないので、雪の降る夕暮れの中を完全装備で出発。湿度が高めで風がないせいか、それほど寒くはなく、夕暮れの雪のドニエプルはなかなか幻想的だった。シャシリクも無事できあがった。

ヒバチ・パーティーを終えてフラットに戻り、しばし歓談。テレビを付けると、ヤヌコービッチ派がドネツク州で大集会をやっていた。こちらのシンボルカラーはブルー。ユーシエンコー派はアメリカのスパイで

不法な行動によりクーデターを起こそうとしている。クチマ大統領らが不法な圧力に屈するようだと、ドネツクなど東部諸州は自治共和国として独立する」と言っているようだ。こちらの演説はロシア語なのでいたい分かる。モスクワ市長のルシコフさんが応援に来ていた。バロージャは、あれはマフィアの集まりだ、とけなしていた。

ドネツク州知事だったヤヌコービッチが首相に指名されたのは二年前の二〇〇二年十一月である。旧ソ連諸国での「現在のお金持ち」はこの一〇年間にびっくりするほどの資産をため込んだわけであるが、いずれも「危ない橋」をうまく渡ってきた人々であろう。ヤヌコービッチさんも刑務所に二回入っていたとか。彼が首相になってから、「ドネツク財閥（マフィア?）」がどつとキエフにやってきて政府の要職についたらしい。今回の抗議行動の直接のきっかけは選挙違反問題であるが、EU寄りかロシア寄りか、ウクライナ語かロシア語か、といった歴史的背景も含めいろいろなものがないまぜになった危機感がオレンジ運動の根底にあるのだろう。

一〇時頃に帰ろうとすると、玄関で見知らぬインテ

り風のおジサンに出くわした。バロージャの知り合いでも何でもなく、ウクライナ西部のリポフから来た学校の先生で、親子で集会にやって来たそうだ。集会本部から宿提供の要請が支持者にあり、バロージャ家も登録したらその親子が紹介されてきたとのこと。オリンピック運動の草の根を垣間見た気がした。

私は二十九日にミンスクに移動し、行きと同じくウイーン経由で十二月五日に帰国した。キエフを離れて以来の主な出来事を簡条書きにしておく。

- ・十一月二十九日 最高裁で選挙が有効かどうかの審議を開始。
- ・十二月一日 最高会議がヤヌコービッチ内閣の信任案を採択（クチマ大統領は不信任を拒否）。
- ・三日 最高裁が、十一月二十四日の中央選管決定を取り消し、十二月二十六日までに再投票を行うよう裁定。
- ・八日 最高会議が、大統領権限を減らす憲法改正案と選挙法改正案を同時に採択し、クチマ大統領は直ちに署名。
- ・八日 最高会議は、中央選管を解散し、大統領の推

薦に基づき新たな中央選管委員十五人を任命。

- ・十一日 ユーシエンコの病気を治療したウイーンの病院が、ユーシエンコの血液サンプルから許容レベルの一〇〇〇倍のダイオキシンを検出したと発表。
 - ・二十一日 ユーシエンコとヤヌコービッチが、二十六日の再投票に向けて一〇〇分間のテレビ討論。
 - ・二十六日 決選投票の再投票
 - ・二十八日 中央選管が、ユーシエンコ五二%、ヤヌコービッチ四四%という最終結果を発表。
 - ・三十一日 ヤヌコービッチ首相が辞意を表明。
- オレンジ色の抗議運動により選挙結果がひっくり返って、近々ユーシエンコ大統領が誕生する。この一カ月余りのユーシエンコ派による大衆運動は「オレンジ革命」と呼ばれたりしている。「革命」と呼ぶのが適切かどうかはともかく、国家権力をどちらが握るかという大政変劇が、今のところ、暴力なしで平和的に推移してきたことは賞賛されてしかるべきだろう。
- ウクライナとベラルーシの一九九九年からのニュースをホームページ (<http://www.rri.kyoto-u.ac.jp/NSRG/Chemoby/etc/RFERL.html>) にまとめているので「関心の向きは参照されたい。
- (いまなかつじ 京都大学原子炉実験所)